

太平洋の島々における 日本人移民の足跡

にわのりお
丹羽 典生 民博 民族文化研究部

南太平洋と日本

第二次世界大戦で敗北を喫するまで、日本は南太平洋に植民地などの形で政治経済的に進出していた。グアムの戦跡、パプアニューギニアの遺骨収集などの話題は、いまでも時折終戦記念日関係のテレビ番組でとりあげられることがある。それ以外だと、ニューカレドニアのニツケル鉱山や、オーストラリアのアラフラ海での真珠漁のための移民は、小説家などが題材としたこともあることから、比較的知られていようか。一方で、ほかの太平洋地域となると、おおかたの人には、忘却の彼方であろう。

「バンノー」でつながる日本とフィジー

かくいうわたしも同じであった。南太平洋フィジーのラウトカという町に滞在していたとき、街角に「Banno」という看板を掲げた寂れた倉庫を目にしたことがあった。しかし、それが何を意味するのかすぐには理解できなかった。バンノーとは、戦前、トンガ、フィジーを中心に太平洋地域で活躍

した日本人企業の名前である。手広く仲買業をおこなっていたため、トンガ、フィジーの人びとのなかには、ついこのあいだまで、日本人をみると「バンノー」と呼びかけることさえあったほどだと言われている。



バンノーの看板、ラウトカ、フィジー、2002年

後日、日本においてバンノー（伴野）の創設者の子孫がいると仄聞して、和歌山県まで足を運んだことがある。居酒屋で知り合いと酒席を囲んでいたときのことである。わたしがバンノーとか、フレディというフィジー側の日本人移民の関係者や子孫の名前を口にしたところ、たまたま居酒屋に来ていた方が、伴野の遠縁にあたり一族の歴史談義に花が咲いたことがあった。さらにその方のおかげで、バンノーという会社の創設者の孫に当たる方のみならず、子期せぬことながらフィジーに残る日本人移民の子孫の遠縁にあたる方々ともお話をすることができた。ほんのちよつとした縁を通じて、日常慣れ親しんだ光景のなから、

興奮することしきりであった。まったく見知らぬ歴史の一コマがあらわれてくるさまに、